筑波学院大学紀要第３集　75～86ページ　　2008年

アンソニー・トロロプ小伝

波多野葉子*

A Short Biography of Anthony Trollope

Yoko HATANO *

Abstract

While working for the Post Office, Anthony Trollope (1815–82) produced forty-seven novels, five short stories, five travel books and some nonfiction, writing about 1000 words an hour every morning. Although he achieved both vocational and literary success, he spent an unhappy childhood, despite his gentlemanly origin. Because of his father's unsuccessful career, he suffered from poverty, thus being enrolled in Harrow as a day boy. He spent miserable public school days feeling humiliated and ostracized partly due to his inferior status. His reputation at the Central Post Office where he worked after leaving Harrow was low until he volunteered to work in Ireland. There his fortune improved, and he felt confident in his profession. It was also in Ireland that he started writing fiction. This essay will explore how he became a popular novelist of the Victorian Age, overcoming various hardships.

抄　録

アンソニー・トロロプはジェントルマンの家系に生まれるが、精神的にも物質的にも恵まれない少年時代を過ごす。パブリック・スクール卒業後、縁故就職した郵便局でも不遇な時代が続くが、アイルランド赴任を転機として道が開けていく。本論はトロロプの生い立ちからパブリック・スクール時代、郵政省時代、アイルランド時代を経て、作家として才能を開花させていくさまを探る。

キーワード：Anthony Trollope, Frances Trollope, The Chronicles of Barsetshire, Victorian publication, The Post Office, Trollope's life, the Victorian novel, public schools, Ireland

生い立ちとパブリック・スクール時代

アンソニー・トロロプ（Anthony Trollope）は1815年４月24日ロンドンに生を受けた。父方の祖はイングランド東部リンカンシャーの准男爵家であった。第四代の准男爵の五男であった祖父はケンブリッジ大学を卒業後叙階し、ハートフォードシャーで二つの教区の牧

＊　情報コミュニケーション学部国際交流学科、Tsukuba Gakuin University

師を務めていた。父、トマス・アンソニー・トロロプ（Thomas Anthony Trollope, 1774–1835）はウィンチェスターからオックスフォードへ進み、優秀な成績を修めた後法曹界を目指し、法廷弁護士として将来が嘱望されていたという。一方、母のフランシス・ミルトン（Frances Milton, 1779–1863）の父は夫同様ウィンチェスターとオックスフォードで教育を受けておりハンプシャーで牧師の職にあった。しかし祖父は成功を収めてはいたが馬具商であり、もとはジェントルマンの家系ではなかった。1809年に結婚したトロロプの両親は、1810年と1818年の間に七人の子供をもうけたが、一人は死産で四人は肺病で早世し、長命であったのは長兄のトム（Thomas Adolphus Trollope, 1810–92））と第五子であったアンソニーのみであった。1816年生まれの妹のセシリアは結婚後五人の子供に恵まれたがそのうち四人は死亡し、彼女自身も1849年に死亡している。

1815年にアンソニーがロンドンで誕生するころには、父は好戦的な性格ゆえに既に法廷弁護士としての経歴に暗雲がかかり始めていた。しかし父は地主の叔父の遺産相続人であることを良いことに散財を重ね、ハローの広い農場に多分期待からジュリアンズ（Julians）と名付けた豪邸を建てる。それは地主階級への仲間入りを果たそうという父の欲望の表れであったことは想像に難くない。まさに “It was the nearest he ever came to becoming a country squire....” と言えるであろう[1)]。田舎に所領を持つジェントリー同化願望は世紀が代わり20世紀になっても経済停滞を招いたほどイギリス人の心理の奥深くに根ざしていたのである[2)]。ましてやれっきとしたジェントルマンの家系であったトロロプ家が、田舎でのジェントリーの生活を手に入れようとしても無理はない。ともかく、それは後に *Orley Farm*（1862）のモデルとなり、ミレーイ（John Everett Millais）が初版本の口絵にその姿を描くことになる家であった。そこに一家はアンソニーが乳児の時に移り住むが、父は農業に手を出し失敗してしまう。その後も父と依頼人や弁護士仲間との関係は改まらないばかりか、期待に反し叔父が再婚し子を成した為、遺産を相続し地主階級に仲間入りする父の夢は潰えてしまう。一家は困窮しロンドンとハローの家は貸しジュリアンズから転居する。トロロプは『自伝』で、父は世に出たときは、全てが掌中にあると思えた才能に溢れる人であったが、何もかもがうまく行かず、次から次へとなけなしの金をはたいて事業に手を出しては失敗した、と述べている[3)]。

父は三人の息子に自分と同等の教育を受けさせるべくハローに入学させるが、貴族や裕福な家庭出身の学生のように寄宿舎に入れることはできず、トロロプ家の息子達は通いの学生としての屈辱を舐めることになる。通学生の数は17人を超えることは決してなく、時には10人以下のこともあったというので、通学生としての劣等感は理解に難くない[4)]。その中の何人かは地元の商人の息子であったが、通学生は全員が奨学生として村の少年用の慈善奨学金を得ていたため、授業料を納める貴族や地主階級の息子達から見下されたのである。トロロプ家の息子達は出自はジェントルマンの息子であっただけに自尊心が高く、その心に受けた傷は深いものであったことであろう。

七歳で兄のトムとヘンリーに加わりハローに入学したアンソニーは、兄達以上の恥辱を受けることになる。兄達も通学生ゆえに貴族的な級友達と同等に扱われることはなかったが、それは他の通学生が受けた扱いと同じ程度のものであった。しかしアンソニーはことさら辛い扱いに耐えなければならなかった。年齢も幼く社会的にも下の身分であることに加えて、着古した服を身に着けていたばかりか長い距離での徒歩通学で体が汚れていたた

めに、仲間から見下されてしまったのである。実際ハローの生徒に相応しくない身なりのゆえに、町で会った校長に生徒と気付かないふりをされたという屈辱的な経験をしている。トロロプ家には子供達に良い身なりをさせる余裕はなかったし、母のフランシスは自分の衣服にも全く興味がなかったようである。当時、子供服は家庭で作るのが一般的であったが、同家の子供達の服は普通とは異なっていたという（Glendinning 16）。トロロプは、後に当時の辛さを『毎日の苦行』（『自伝』３）と語っているが、仲間から孤立し劣等感に苛まれた当時の辛い経験が、自分の紳士的な家系に重きを置く彼のプライドを傷つけ、後に社会的成功を望むトロロプを作り出す一因となったことは想像に難くない。マクドナルド（Susan Peck Macdonald）は子供時代の惨めな体験がなかったら、トロロプは小説家、少なくとも彼がなった種類の小説家にはならなかったであろう、と述べているが[5]、自分が所属意識を持っていた階級での微妙な立場が、自分が閉め出されてしまった階級への思い入れを生み、彼を「ジェントリー階級の記録者」と呼ばれるようにさせたものと思われる。

アンソニーはハローで三年間過ごした後サンベリーでアーサー・ドゥルーリー（Arthur Drury）が営む私立学校に転校する。これはアンソニーのハローでのチューターであり、父の友人であったヘンリー・ドゥルーリーの忠告によるものであった。後年トロロプはその理由をドゥルーリーがアンソニーのハローでの教育が思うように進んでいないと進言したのであろうと推測している。サンベリーでは小遣いはなかったものの、長い学校時代で最も級友と同等に暮らせた時期であった。とはいえ彼は常に不名誉な思いをし、ある時は無実の罪を着せられたこともあり、50年経った後にもその時の悔しさを思うと顔が紅潮すると述べている（『自伝』５）。

二年間サンベリーで過ごした後12歳の時に（1827年）アンソニーはウィンチェスターに入学するが、それは自分同様息子たちにオックスフォードのニュー・コレッジでのフェローになる資格を得させようという父の希望から出たものであった。ウィンチェスターでの生活はハローほどには惨めではなかったようだが、それでも疎外感はもっていたようである。

その後一家の経済状態はますます厳しくなり、母は窮状を脱する為にヘンリーと幼い妹二人を連れて1827年に渡米し、シンシナティでバザーを開催する。後に父と長兄も一行に加わり、アンソニーは英国に一人取り残されてしまう。しかしバザーは失敗に終わり一家の経済状態はさらに悪化したばかりか、次兄のヘンリーは健康を損なってしまう。その間ウィンチェスターでのアンソニーの生活費の勘定は支払われず、彼は屈辱感に打ちのめされる。当然この状況は級友にも知られ、彼は「のけ者」（８）となってしまうが、彼には一人とて悲しみを打ち明ける友はなく、孤独で惨めな境遇に陥ってしまうのであった。『自伝』で体格は大柄で所作はぎこちなく、醜く、身なりは貧しく不潔で、コレッジの塔から身を投げて何もかも終わりにしてしまいたかった、と当時の惨めな様を伝えているほどである。さらに毎週の小遣い用の一シリングの入金が途絶え、それが原因でコレッジの使用人への手当てが減額された時には強い罪悪感に囚われ、アンソニーの苦悩は極限に達してしまう。

1830年に父がアメリカから帰国し、アンソニーは三年間程在学したウィンチェスターを退学するが、その理由が授業料が捻出できなかったからなのか、それともニュー・コレッジでフェローになる可能性がないと父が判断したからなのかは定かではない。スノウ（C. P. Snow）はこの決定を父自身の最後のしかも良いチャンスを台無しにしてしまったと述べ

ている。ニュー・コレッジでフェローになるのは空席数と同級生との競争で決まるが、その年には競争相手はわずかで、アンソニーが19歳でフェローになる確率は高かったというのである[6)]。その道を選んでいれば、若い頃からイングランド国教会高教会派であったトロロプは牧師になっていたであろうとスノウは想像している（29）。そうであれば、スノウが述べるように、「バーチェスター物語」[7)]で聖職者階級の世界を描く代わりに、自分がその世界の住人となっていたことであろう。とにかく、バーセットでは高教会派の登場人物が好意的に描かれているが、それにはトロロプ自身の信条が投影されていたと見てもあながち無理はない。

ともあれその後ハローに復学するが、再び通いの生徒としてハロー・ウィールドと学校の間を毎日12マイルも歩かなければならなかった。トロロプはこの18ヶ月が人生で最悪の時期であったと述懐している（『自伝』９）。15歳になっていたアンソニーは、仲間から軽蔑され社会的な交際から締め出されることの惨めさを、充分理解できる年齢になっていたのである。さらに給費生であることの劣等感に加えて、チューターがアンソニーからは費用をとっていないことを級友の前で公言した時は、チューターの厚意を感謝することなどできるはずもなかった。アンソニーのこのような回想があながち被害妄想ではなかったことは、アングロ・アイリッシュの地主で後にセイロン総督になったサー・ウイリアム・グレゴリーの回顧録に窺える―

> I avoided him, for he was rude and uncouth, but I thought him an honest brave fellow. His faults were external; all the rest of him was right enough. But the faults were of that character for which schoolboys will never make allowances and so poor Trollope was tabooed.... He gave no sign of promise whatever, was always in the lowest part of the form....（Snow 31）

しかし実際にはアンソニーは英語のエッセーで賞を取っており、グレゴリーの回想も『自伝』の影響を受けていることが窺える。またハロー時代の二、三年後にはアンソニーはグレゴリーをしばしば訪れており、共に狩に興じているばかりか、晩年にはセイロン総督時代のグレゴリーを邸に訪ねている。いずれにしてもグレゴリーの回顧録がトロロプの少年時代に関して級友が残した唯一の記述である。また、当時アンソニーは今にも潰れそうなハロー・ウィールドの田舎家に、常に負債に苦しむ父と二人で住んでおり、乏しい食糧を補うためにしばしば農作業をさせられたがたいした助けにはならなかったようである。その頃父は病に侵されながらも *An Encyclopaedia Ecclesiastica* を執筆していた。学究的才能に恵まれながらも性格的欠陥ゆえに不遇の一生を送る様は、*The Last Chronicle of Barset*（1867）のクローリー（Crawley）牧師の姿に投影されている。

母は1831年にアメリカから帰国し、アメリカでの経験をもとに *Domestic Manners of the Americans* を翌年出版すると一家の経済状態は多少改善し、一家はハロー・ウィールドからハローに転居する。母がジュリアンズの近くの丘の上にある家を購入したのである。この家はジュリアンズ・ヒルと名付けられた（Snow 33）。転居の結果通学距離は短縮し服装にも変化が現れるが、学校では相変わらず孤立しており、クリケット等のスポーツに入れてもらえることはなかった。この頃の自分を浅ましいほどに人気を望んでいたとトロロプは回想している。こうした学校時代の恥辱は生涯彼についてまわり、ハローやウィンチェスターの学友に会っても共に語る権利がないとさえ感じる、と後年語っている。この

様な状況ではあったが、父はアンソニーがオックスフォードかケンブリッジに進学することを相変わらず望んでいた。長兄のトムはオックスフォードに、次兄のヘンリーはケンブリッジにそれぞれ進学していたが、アンソニーは卒業時には優等生であったにもかかわらず奨学金が得られず進学を断念し、1834年に19歳でハローを去ることになる。トロロプは12年に及ぶ教育でラテン語とギリシャ語以外何も学ばなかった、とパブリック・スクールでの教育を否定的に評価しているが、後年ラテン語の古典に通じ、1870年には *Commentaries of Caesar* の翻訳を出版し、その10年後には *The Life of Cicero* を完成させているのは、当時受けた古典教育の賜物であろう[8)]。

郵政省時代

50歳になり初めて筆を取った母に支えられ、トロロプ家にはささやかな幸せが訪れていたがそれも長くは続かず、1834年に負債のために家財は差し押さえられる。アンソニー自身が理由も知らされずに病身の父を馬車に乗せ、ロンドン経由でオステンド行きの船に乗せることになるが、それは投獄を免れるためであったのである（Pollard 4）。その後父の後を追い、一家はベルギーのブリュージュに逃げるように移る。この間一家の生計は母一人が支えることとなり、ヘンリーと妹のエミリーが肺病を患うなかで、母は父の看病もしながら生活の資を得るために文筆活動を続けたのである。アンソニーと姉は健康であったが、アンソニーは将来に関して何の抱負も持たず無為徒食の日々を過ごし、ただ55歳の母独りに頼るのみであった。こうした母の果敢で忍耐強い姿をトロロプは深い敬愛の念で描き、この最も辛い時期に彼女の最上の小説が生まれたと述べている（『自伝』26）。このように一家をひたすら支えた母ではあったが、一家の窮乏には彼女にも大きな責任があるとスノウは述べている（17）。彼女は思慮に欠け、一家の没落の契機となった分不相応なジュリアンズの建築にも彼女の意向が反映していたと見ているのである。そして、トロロプ氏の自己を正当化するような夢と妻の楽観性には響き合うものがあると結論付けている（18）。

丁度この頃アンソニーにオーストリアの騎兵隊入隊の話がもちあがるが、ドイツ語とフランス語の能力が要求されていたため、その習得費用を節約すべくブリュッセルでハロー時代の恩師が経営する学校に古典語の助教として赴く。しかし僅か六週間後にロンドンの中央郵便局での職を得、ブルッセルを去ることになる。これはアンソニーの窮状を見かねた母の親しい友人であるクレイトン・フリーリング（Clayron Freeling）夫人の口利きによるものであった。当時郵政省はフリーリング一族の勢力下にあり、夫人の舅であるサー・フランシス・フリーリングが1797年から1836年まで長官を務めていたのである（Sanders 8）。こうしてアンソニーは帰国することとなるが、ブリュージュのトロロプ家では母の必死の看病にもかかわらずヘンリーは1834年に、そして父は1835年に世を去る。母は父の死後帰英するが、翌年エミリーも二人の後を追い帰らぬ人となる。

19歳のアンソニーはロンドンで郵便局での採用にあたり適性試験を受ける。この試験の詳細は *The Three Clerks*（1858）冒頭の数章に正確に描かれているが、『タイムズ』の写しも満足に取れないばかりか、算数にも自信がないという状況であった（『自伝』30）。なにしろ九九も習ったことがなかったのである。このような状況にもかかわらず、アンソニーは職を得る。こうした公務員の縁故採用は競争試験が導入される1850年代まで続いていたのである。トロロプは「当時公務員の試験はこんなものだった」（31）、と後年述懐し、万

民に能力試験が開かれるようになった状況を憂い公然と異議を唱えている。そのような試験は詰め込み勉強の悪弊をもたらし、学生になんら教育効果は与えないばかりか、合格した暁には自分の能力の過大評価に繋がると主張し、さらに若者の振る舞い、礼儀、人格を育てる者は皆無であると嘆いているのである(32)。さらに誰も公言はしないが仲間内では囁いているとして、“There are places in life which can hardly be well filled except by ‘Gentlemen’” (34), と述べている。つまり、ジェントルマンの優越性を固く信じ、それを非ジェントルマンが身につけることは望むべくもないものである、よって公務員職はジェントルマンにのみ与えられるべきであるとの主張である。このような考え方がトロロプの時代でさえも批判されるものであることは、“As what I now write will certainly never be read till I am dead,...” (33-34)、と書かれていることから明らかであるが、トロロプはなおも持論を展開する—

> It may be that the son of the butcher of the village shall become as well fitted for employments requiring gentle culture as the son of the parson. Such is often the case. When such is the case, no one has been more prone to give the butcher's son all the welcome he has merited than I myself; but the chances are greatly in favour of the parson's son. The gates of the one class should be open to the other; but neither to the one class nor to the other can good be done by declaring that there are no gates, no barrier, no difference. The system of competitive examination is, I think, based on a supposition that there is no difference. (34)

この主張は「ジェントリーの生活の記録者」と呼ばれたトロロプならではのものであろう。トロロプのこうした反民主主義とも言える考えはジェントルマン賛美から発したもので、彼はジェントルマンの精神的優越性を固く信じており、そうした信条はトーリー主義擁護として「バーチェスター物語」に鮮明に現れている。そして、自分は綴りは不確かであったし、科学の基礎にも無知であったが、同じ階級で同年齢の平均的青年より知識があったと述べている。実際シェイクスピアやミルトン等の文学的素養や英国の政治に深く通じていたのである (35)。

さて1834年に郵便局に職を得たトロロプはその後26歳までの七年間を事務員として過ごすが、遅刻の常習犯で違反も多く、厄介者で信頼できないという汚名をとっていた。行状を改めなければ解雇されるとの噂が時折本人の耳にも入り、クレイトン・フリーリング夫人が涙ながらに母のことを考えるようにと訴えることもあったという。とはいえサー・フランシス・フリーリングは死の床から、心温まる手書きの書簡を一度ならず認めてくれたのである。

サー・フランシスの後任はメイバリー大佐 (Colonel Maberly) であったが、今回は勝手が違っていた。己の能力の限界も知ってはいたが、もっと判断力がある人であったなら、あれほど自分のことを低く評価はしなかったであろう (38)、とトロロプは振り返っているが、実際彼は全くの役立たずとして扱われ、深く悩むことになる。自分に仕事をする意志があることを示そうと足掻きはしたが悪い性癖は付いて回り、自分の職掌である迅速かつ正確に文書を作成する能力にも欠けていたようである。彼は常に解雇の瀬戸際にあったが、もしチャンスさえ与えられれば素晴らしい公務員になれることを示そうと苦心していた。こうした状況のもとで一度は小切手が同封されていた長官宛の手紙を盗んだ嫌疑をかけられたことさえある。

トロロプは常に問題を抱えていた。ある女性が一方的に彼との結婚を望み、母親が局にまで乗り込んできたこともあったし、ある時期には懇意になった金貸しが連日トロロプの職場まで通いつめることさえあった。こうした私的な問題も全て職場での立場をさらに悪化させたのは当然であろう。解雇の不安と負債に常に悩まされながら自堕落な生活を送っていたが、往時を振り返り、その原因をきちんとした家庭の監督下に置かれていなかったため、まだ至らないことの多い青年が野放図な生活に陥ったのだと弁解がましく述べている。ともかく仕事も嫌いだったが、何よりも怠惰な自分を嫌悪していたのである。しかし注目すべきは、こうした苦境から逃れるために、既に小説家としての未来を視野に入れてはいたのである。ここで明確に、自分の文学的才能が詩や劇ではなく小説にあると自覚していたことは流石である。しかしその実行を一日延ばしにしている自分に精神的屈辱を感じていたのであった。とはいえこの時期にフランス語とラテン語を学び、ホラティウスや英文学に親しむようになっていた。仲の良い二人の友人と “the Tramp Society” と名付けたクラブを作り、その名の通りロンドン近郊を徒歩で散策するのは当時の最も幸せな時間であった。また、姉が結婚した郵便局の上司であるジョン・ティリー（John Tilley）とは40年来の友情が続くことになる。当時の経験は *The Three Clerks* に生かされているばかりか、前述の女性問題は *The Small House at Allington*（1862–4）のヒロイン、リリー・デイルに純愛を貫くジョン・イームズが起こす下宿屋の娘アメリアとの恋愛沙汰に反映されている。

アイルランド時代

郵政省に就職してから七年近く経ったところで、トロロプに大きな人生の転機が訪れる。西アイルランドの監督官付きの事務官が無能であるとの報告書が届くが、それをトロロプが偶然最初に読むのである。彼はこの好機を捉え大胆にも直接長官にアイルランド赴任を志願する。彼を厄介払いして長官は喜んだであろうが、実際、当時アイルランドへの転勤は降格と見なされていた。報酬は高いが「アイルランド監督官付き事務官の職ほど悪いものはないという先入観」(49) があったのである。こうしてトロロプは1841年に26歳にして監督官付事務官として、無能な人間しか行かないと思われていた西アイルランドに職を得る。しかし、この転勤がきっかけで、トロロプの運は上向きに転じるのである。

ダブリン到着直後にアイルランド郵政省に出頭してみると、メイバリー大佐からの長官宛のトロロプの推薦書がはかばかしくなかったことが判明する。もとより良い推薦書など望むべくもなかったとはいえ彼は気落ちする。しかし、そんなトロロプに向かい新しい上司は先入観では判断しないと語ったのである。そして一年も経たないうちに、トロロプは良い評価を受けるようになる。楽しく時間が過ぎ、冒険もいくつか経験し、その中の二つは短編集 *Tales of All Counties*（1861）に収められている（53）。

アイルランドでの報酬は過去の負債を返済するのに十分であったし、仕事を楽しむ余裕もでき、ロンドン時代より勤勉に働いた。その結果自信も生まれると同時に周りからの尊敬も得られる様になっていった。彼は広範に馬で視察し郵便配達の効率を改善し苦情も調査したが、この時代に生涯の趣味となる狩の楽しみも覚え、狩の場面はその後の作品中にしばしば登場する。彼はまたアイルランドの貧困にも接し、1845年以降はじゃが芋の病気が引き起こした壊滅的な飢餓と、それに続く疫病も目の当たりにしている。アイルランドでの経験はトロロプの処女作である *The Macdermots of Ballycloran*（1847）を始め、

The Kellys and the O'Kellys（1848）, *Castle Richmond*（1860）, *An Eye for an Eye*（1878–9）, *The Land-Leaguers*（1882–3）のアイルランドを舞台とする五作品に反映されており、彼がアイルランドの田園地帯での生活に通じていたことが窺がわれる。彼は同地でアイルランドを題材として作家としてのキャリアを開始したのであるが、トロロプほどに広範にアイルランドを一貫して題材にした英国の作家は19世紀には存在しない（Sanders 10）。

1842年にはトロロプは後に妻となる ローズ・ヘーゼルタイン（Rose Heseltine）に出会い、二年後に二人は結ばれている。ローズとの結婚は幸せなものであったが、妻や彼女の家族について彼はあまり語っていない。ローズの父は銀行のマネージャーになった人物であるが、退職後は銀行の資金を不正流用していたことが発覚し、逮捕を逃れる為に渡ったフランスで死亡しているので、あまり触れたくない話題であったのであろう。二人の間には1846年にヘンリーが、翌年フレデリックが誕生している。

1851年にアイルランドでの功績が認められたトロロプは、イングランド南西部に二年間臨時に配属される。その間広範に同地方を視察するが、その際1852年にウイルトシアの大聖堂の境内を訪れた折、「バーチェスター物語」の第一作目となる *The Warden*（1855）の構想が閃く（『自伝』77）。トロロプはこのシリーズで作家としての名声を得ることになるが、ロングマンが支払った *The Warden* の原稿料は当初わずか20ポンド、次の *Barchester Towers*（1857）は前金が100ポンドであった[9)]。

小説家としての未来をこの時期に開いたトロロプであったが、1851年に道端に郵便箱を設置する提案も行っており、翌年第一号の郵便箱がチャンネル諸島ジャージー島のセントヘリアに設けられている（『自伝』236）。彼はなんと郵便箱の発案者なのである。その後アイルランドに戻ったトロロプは1854年に代理監督官に任命される。さらに1858年にエジプト、マルタ、ジブラルタル、エルサレムに出張するが、それは後の公私にわたる海外旅行の先駆けとなった。こうした海外旅行が *North America*（1862）等の旅行記四作の基礎になったことは言うまでもない。

文人トロロプ

1859年にトロロプはアイルランドを去り、英国東部の監督官に任命される。一家はロンドンへの便の良いエセックスに居を定めるが、そこでの12年間は公的にも、そして小説家としても実りの多い時期であった。二足の草鞋を履いたトロロプは、毎朝五時半に起床し15分に250語という目標を設定して、機械的とも言えるほどに規則正しく執筆していったのである。この時期彼は少なくとも週に二回は狩も楽しみ、自分ほど充実した生涯を送った人物はいないであろうと『自伝』で述べている（174）。郵政省での最後の七年間には、*Framley Parsonage*（1861）, *Orley Farm*（1862）, *The Small House at Allington*（1864）, *Can You Forgive Her?*（1864–5）*The Last Chronicle of Barset*（1867）等、彼の人気と栄誉の頂点を示す作品を生み出している。この時期トロロプが尊敬するサッカレーが編集する *Cornhill Magazine* との繋がりが生まれたことも注目に値する。1860年に「聖職者が登場する英国の物語を」（120）、という発行者のジョージ・スミスの要望に応じて連載した *Framley Parsonage* は大当たりし、*Cornhill* の成功に多いに貢献した。なんと同誌の売り上げは二、三ヶ月の内に110, 000部に達したのである[10)]。またこの時挿絵を描いた ミレーイとの繋がりも生まれ、彼の挿絵はその後も *The Small House at Allington* や *Orley Farm* の頁を飾ることになる。とはいえいかにミレーイの作品といえどもトロロプの気に入らないこ

ともあり、例えば*Framley Parsonage*の16章の挿絵に関してジョージ・スミスに不満を述べている[11)]。ともあれ、*Cornhill*との繋がりから更に当時の著名な文人との交際も増え、ジョージ・エリオット（George Eliot）の家でブラウニング（Robert Browning）やテニスン（Alfred Tennyson）、ハーバート・スペンサー（Harbert Spencer）等、当代一流の知識人と面識をもつようになる（Pollard 7）。1860年にはエリオットの内縁の夫であるG. H. ルイス（Lewes）の子息の郵政省での就職にあたり、総裁であったアーガイル公爵に指名を依頼している。これに対してルイスは日記に、トロロプへの依頼は情報提供のみであったにもかかわらず、非常に親切に便宜を図ってくれたことに対し感謝の念を綴っている（*Letters* 109）。トロロプはさらにギャリック・クラブにも入会し、アテナイウムの会員にも選ばれる（『自伝』132）。こうした交際からトロロプが得たものは多く、ポラードはトロロプはエリオットを尊敬し、エリオットも彼女の傑作である*Middlemarch*（1872）がトロロプの影響を受けていたことを認めていると述べている[12)]。

トロロプはまた1860年に兄トムをフロレンスに訪ねた折、21歳のケイト・フィールド（Kate Field）に出会う（Sanders 18）。彼女は才気煥発で知的なアメリカ人女性で、後に女権運動の擁護者となる（Pollard 6）。二人の友情は永く続きトロロプは明らかに彼女に恋愛感情を覚えていたことが窺えるが、妻ローザは黙認していたようである。バーセットのルーシー・ロバーツを始めとして、トロロプの描く女性には独立心が強く男性を凌駕する判断力と行動力を発揮する女性が多いが、それにはケイトとの交友が影響していたことは容易に想像できる[13)]。

こうして小説家としての成功を納めたトロロプは1867年に33年間勤めた郵政省を去ることになる。以前から60歳退職時の年金と同額の預金ができた暁には職を辞すことを妻と決めていたが、その時が来たのである。とはいえ、ペニー・ポストを発案した近代郵便制度の父であるサー・ローランド・ヒル（Sir Rowland Hill, 1795–1879）を継ぎトロロプの義兄が長官に就任した時、トロロプは空席の次官職に応募したが選ばれなかったという経緯がある（『自伝』113）。これは必ずしも退職が唯一の選択肢ではなかったことを窺わせる出来事で（232–33）、トロロプには狩や作家としての成功を犠牲にしても、郵政省での出世を望む気持ちがあったことが分かる。実際、作家活動もしていたため本職に専念していたわけではないが、自分の文学作品より郵政省のことを考えていたと述べている（236）。寒村の住人が切手を購入できることや配達員が過労にならず適切な報酬を得ることなども、常に気にかけていたのである。こうした心遣いは*Framley Parsonage*のレディー・ルフトンの領民への心遣いと重なる。ともかく彼は郵政省に強い愛着を感じていたし、取り扱う手紙にも愛情を持っていた。トロロプのこうした思い入れは現代では少々滑稽に感じられるかもしれないが、ネットの出現で手紙より至便な通信手段が生まれ郵便の重要性が低下した現代とは異なり、郵便の有用性が高かった当時に彼がそうした感情を持つことは自然なことであった。ペニー・ポストや郵便箱の考案は当時では画期的な出来事で通信事情を大幅に改善した。それどころか現代から振り返ってみると、通信手段の改善は国民の空間意識にも変革をもたらしたことが考えられる。このように文化的に著しい影響を与えた郵政省での仕事に対し、彼が誇りを持っていたことも容易に推測できよう。とすれば、ポラードが指摘するように、在任期間の後半は終始サー・ローランド・ヒルと険悪な仲であったトロロプが、己が才能と奉職が正当な評価を得ていないと不満を感じたこともありうるであろう（7）。実際、1864年にはヒルの後任

であった義兄のジョン・ティリーに宛て、監督官の昇給を郵政大臣に進言するよう書状を送っている。これは同僚五名との連名であったが、筆跡はトロロプのものとされている（*Letters* 259）。この一件が示唆するように、長い不遇の時代を経て人気作家になったトロロプは世俗的栄達や物質的に快適な暮らしを求めていた。実際、金銭欲は人間の本性に適っており、全ての物質的進歩は自分と周りの者に最善を尽くそうとする欲望から生まれるもので、収入が多いほど同胞のためになる（『自伝』89）、と主張している[14)]。ともあれ彼は郵政省での栄達の道が閉ざされたため、当初の計画に戻り退職することになる。「こうして綱は切れ、私は世界中どこにでも行ける自由の身になったのである」（237）、と60歳を過ぎて当時を述懐する言葉にはトロロプの寂しさが滲みでている。

辞職の少し前に出版業者のジェイムズ・ヴァーチュー氏から年千ポンドという高報酬で新雑誌編集の強い依頼を受ける。始めは断ったトロロプであるが遂に申し出を受け入れ、新雑誌を *Saint Paul's Magazine* と命名する（238–39）。この選択をスノウは、ディケンズのように優れたジャーナリスト兼興行主の才能もなければ、*Cornhill* のジョージ・スミスのような才気のある出版者も後ろ盾についていなかったトロロプには誤った選択であった、と厳しい評価を下している（136）。しかし、同誌にはトロロプの最上の政治小説 *Phineas Finn*（1867–69、ミレーイの挿絵付き）と *Ralph the Heir*（1870–71）が連載される。彼が三年半編集長を務めた間に、レズリー・スティーブン（Leslie Stephen）、オリファント夫人（Mrs. Oliphant）、トレヴェリアン（Sir Charles Trevelyan）、G. H. ルイス、やはり作家の道を選んだ兄のトマス等、多数の文人の助力を得るが雑誌は失敗に終わる（『自伝』240）。部数は10, 000部に達していたが、採算が合わなかったのである。しかし、編集者の職から得られた報酬は以前から抱いていた政治的野心を追求するのに十分な額であった。そして、1868年に彼はヨークシャーの ベヴァリーからリベラルとして国会議員選に出馬する。“…I have always thought that to sit in the British Parliament should be the highest object of ambition to every educated Englishman”（242）と述べていることからも分かるように、国会議員になることはトロロプ生涯の夢であったが落選し、苦い思いを噛み締めることになる。これにはサー・ローランド・ヒルに退職前に英米郵便協定を立ち上げるためにアメリカに派遣されたが、その間に南東エセックスからリベラルとしての指名を受けることができず、その代わりにベヴァリーで出馬した経緯がある。彼の獲得投票数は最低であったが、収賄と腐敗のために選挙は無効となり、選挙区は議員選出権を喪失する結果になった。この時の経験は *Ralph the Heir*（1871）に描かれている（Pollard 7）。『自伝』で自分の政治的立場を “an advanced Conservative-Liberal”（243）と称しているトロロプではあるが、その信条はエスコットが主張するように、彼は生来貴族よりで反動的トーリー主義者であった（Pollard 8から引用）[15)]。スノウはこの出馬に関しても辛らつで、ディケンズがトロロプは気がふれたのではないかとトム・トロロプに手紙を送ったことを紹介している。

晩年

1860年代の終わりからはトロロプの文人としての評価も下り坂に差し掛かる。それには *St. Paul's Magazine* での失敗が起因しているとサドラー（Michael Sadleir）は見ている（Macdonald 9）。加えて出版社とのトラブルのみならず、“part issue was outmoded, and could no longer compete with magazine fiction” であったばかりか、彼は書きすぎてしまった

のである[16)]。*Phineas Finn*（Oct. 1867–May, 1869）の連載と *He Knew He Was Right*（Oct. 1868–May 1869）の連載が半年程重なったり、*The Last Chronicle*（1866–67）と *The Claverings* の長編小説が同時に連載されることもあったのである。（Skilton 30）またトロロプの人気を作り出した「バーチェスター物語」が終わってしまったことに加え、後期の作品は暗く悲観的になっていったことも原因と言われている。そして1870年以降トロロプはほとんど批評の対象にもならなくなってしまい収入も減り始めてしまう（32）。こうした状況は絶頂期には当時の時代精神と感性の解釈に定評のある "the depot of the lending-libraries" として文壇に君臨した姿とは雲泥の差であった（Sadleir, Skilton 17より引用）。

しかしトロロプは「バーチェスター物語」に次ぐ代表作である政治小説群の「パリザー・シリーズ」のほとんどを名声が翳り始めてから執筆しているばかりか、「パリザー・シリーズ」以外の小説やノンフィクションも数多く生み出している。主題も多岐にわたり、たとえば「パリザー」に含まれる *The Eustace Diamonds*（1873）は当時の法律を軸にしたコリンズ（Wilkie Collins）も顔負けの推理小説で、トロロプが当時の法律にも通じているばかりか推理小説の才にも恵まれていたことを示している。実際、*The Eustace Diamonds* が英国の推理小説の伝統に含まれてもなんら不思議はない。ただ当時は認められなかった後期の作品が、その真価を認められるには後世まで待たなければならなかったのである。

1880年に夫妻はロンドンからサセックスとハンプシャーの境にある村に移り、その二年後にトロロプはロンドン滞在中に卒中が元で帰らぬ人となる。全生涯で生み出した小説はなんと四十七作、短編集五、旅行記五、二十世紀に出版された *London Tradesman*（1927），*Four Lectures*（1938），*The New Zealander*（1972）を含むノンフィクションは十二作にのぼる多作な作家であった。そして1876年に執筆し、遺言通り死後出版された『自伝』はトロロプ研究の重要な資料となっている。

注

1）Arthur Pollard, *Anthony Trollope* (London: Routledge & Kegan Paul, 1978) 2.

2）イギリス人のジェントリー同化願望に関しては、Martin J. Wiener, *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit 1850–1980* (Harmondsworth; Penguin, 1981), に詳しい。また、拙論「家庭の天使と新興中流階級のジェントリー同化願望」『東京家政学院筑波短期大学紀要』第５集、1995、も参照されたい。

3）Anthony Trollope, *An Autobiography* (1883; Berkeley and Los Angeles: Univ. of Calif. Press, 1978) 27.

4）Victoria Glendinning, *Trollope* (1992; London: Pimlico, 1993) 16.

5）Susan Peck Macdonald, *Anthony Trollope* (San Diego: Twayne, 1987) 2.

6）C.P. Snow, *Trollope: An illustrated biography,* (New York: New Amsterdam Books, 1975) 29.

7）トロロプの作品中もっとも人気がある作品群で、バーセットシャーという架空の地域を舞台に、地主階級や聖職者の生活が描かれている。各作品の主人公は異なるものの、シリーズを通して同じ人物が登場し他の作品の登場人物とそれぞれ関係を持ち、大きな作品世界を形成している。*The Warden* (1855), *Barchester Towers* (1857), *Doctor Thorne* (1858), *Framley Parsonage* (1861), *The Small House at Allington* (1864), *The Last Chronicle of Barset* (1867) の六作からなる。

8）Andrew Sanders, *Anthony Trollope* (Plymouth, UK: Northcote House, 1998) 7.

9）当然、トロロプはこの条件には不満足であったが、その後原稿料は上昇し、ベントリーは *The Three Clerks* には250ポンド、*Doctor Thorne* にはチャプマン・アンド・ホールが400ポンド、*Framley Parsonage* には新設の *Cornhill Magazine* に連載したスミス・エルダーが1000ポンド支払っている (Pollard 6)。

10）P. D. Edwards, introduction, *Framley Parsonage*, by An-

thony Trollope (1861; Oxford: Oxford UP, 1988) xii.

11）Anthony Trollope, *The Letters of Anthony Trollope*, ed. N. John Hall, vol.1 (Stanford: Stanford UP, 1983) 104.

12）トロロプは尊敬する同時代の作家としてサッカレーをまず挙げている。サッカレーの人間性への理解と登場人物が人間として描かれる様が際立っていると考えるからである。第二に評価しているのはジョージ・エリオットである。しかし、エリオットは創造性より分析的傾向が強すぎて、小説というより哲学を読んでいる気がしてくる、さらに若者が *Felix Holt*、*Middlemarch*、*Daniel Deronda* を楽しく読めるだろうか、と疑問を呈している。シャーロット・ブロンテも高く評価し、難点はあるものの *Jane Eyre* は後世まで読み継がれるであろうと述べている。しかし、ディケンズは当代随一の人気作家であることは認めるが、人間が描けておらず、ペーソスさえも芝居がかっておりメロドラマ風だとし、あまり評価していない（『自伝』203–8）。

13）バーセットの女性達については、拙論、"Trollope's Admirable Women and Their Literary Sisters: A Continuing Quest for the Bearer of the Country House Tradition," *The Victorian Newsletter* No.91 (1997): 31–36. を参照されたい。

14）トロロプの金銭観については、拙論「The Eustace Diamonds －トロロプ版ヒーロー不在の小説」『藤原保明博士還暦記念論文集　言葉の絆』、開拓社、2006、519–32. を参照されたい。

15）トロロプのトーリー主義については、拙論「バーセットシャーにおけるトロロープのトーリー・ヴィジョン」『東京家政学院筑波女子大学紀要』第 2 集、1998、53–65.（The Eleventh International Conference on Medievalism — Kalamazoo College, Michigan において1996年 9 月 4 日 － 7 日に開催－で口頭発表した原稿に加筆し邦文にしたもの）を参照されたい。

16）David Skilton, *Anthony Trollope and his contemporaries* (New York: St. Martin's Press, 1972) 30.